

第5章

社会全体の意識改革

第1節 社会的な意識改革の必要性

1 子育て家庭を取り巻く状況と家族をめぐる変化

(1) 子育て家庭の変化
(家族形態の変化)

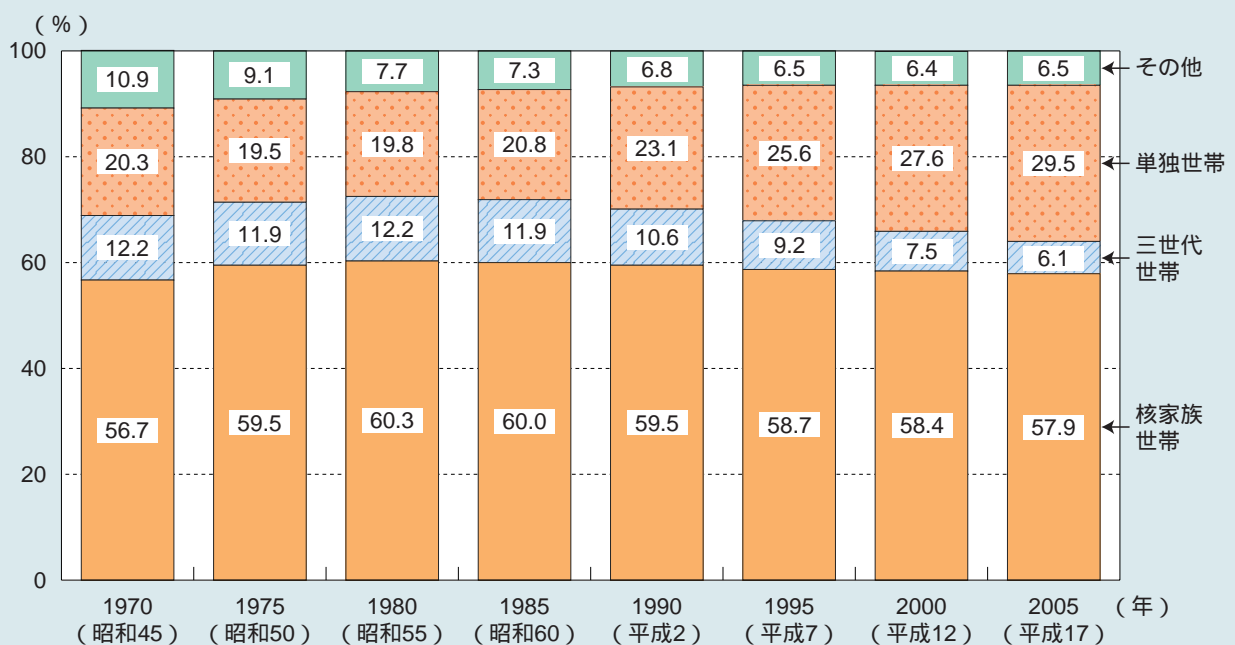
第1章で解説したとおり、わが国では、未婚化や晩婚化の進行という結婚をめぐる変化に加え、近年では結婚した夫婦が持つ子どもの数も漸減傾向にある。こうした状況の背景として、育児に関する精神的・身体的・経済的な負担や、家庭・育児と仕事の両立が困難な職場での働き方に加え、核家族化や都市化の進展等による家庭の養育力の低下や地域における相互助け合いの低下があり、かつては家族や近隣から得

られていた知恵や支援が得られにくいという育児の孤立、といった問題点が指摘されている。さらに、これらの問題点の中には、家族や家庭をめぐる変化が影を落としているものがあると考えられる。

まず、家族形態の変化であるが、2005（平成17）年の総務省「国勢調査」によれば、一般世帯数は4,906万世帯、世帯人員は1億2,497万人で、1世帯当たり人員は2.55人と過去最低を記録した。1985年には3.14人であったから、20年間に世帯の規模が0.6人分小さくなった。

世帯類型別構成割合をみると、近年では、「三世代世帯」の割合は、1980（昭和55）年の

第1-5-1図 世帯類型別構成割合



資料：総務省統計局「国勢調査」

注：ここでは、「三世代世帯」は、「夫婦、子どもと両親から成る世帯」及び「夫婦、子どもとひとり親から成る世帯」の合計としている。

12.2%をピークに低下傾向にあり、2005年は6.1%となっている。また、「核家族世帯」の割合も、1980（昭和55）年の60.3%をピークにやや低下傾向にあり、2005年は57.9%となっている。他方、「単独世帯」の増加は顕著であり、1975（昭和50）年の19.5%から2005年には29.5%に上昇している。このことは、未婚化・晩婚化の進行を背景に単身者が増加し、さらに、彼らが家族と同居しないケースが増加していることや、高齢化の進行に伴い高齢者の単身者が増加していることを反映している。

三世帯世帯は家事などを多くの世帯人員で分担することが可能となるが、核家族世帯や単独世帯では少ない世帯人員で担うこととなるため、男性も家事や育児への参加が求められてきたといえる。

（子どものいる世帯の状況）

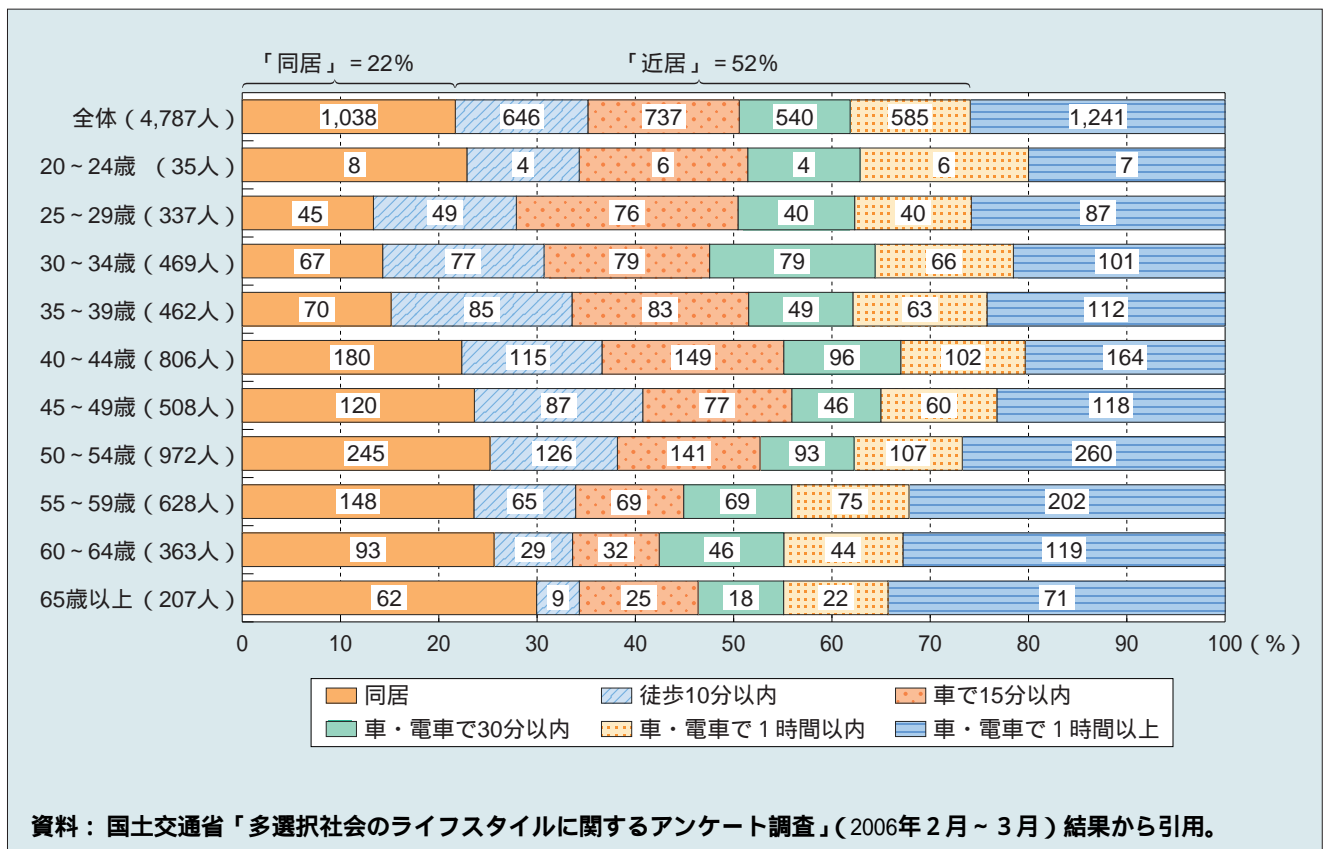
児童（18歳未満の未婚の者）のいる世帯の状況については、第1章でみたとおりであるが、

厚生労働省「国民生活基礎調査」によれば、2005年では児童のいる世帯数は1,237万世帯、そのうち夫婦と未婚の子のみの世帯が830万世帯（児童のいる世帯の67.1%）、ひとり親と未婚の子のみの世帯が78万世帯（同6.3%）、三世帯世帯が294万世帯（同23.8%）となっている。三世帯世帯の割合が漸減する一方で、ひとり親世帯の割合が増加している。

なお、国土交通省の調査によると、既婚者で親と同居しているのは22%、親が1時間以内の近距離にいる「近居」は52%を占め、遠距離に住むのは26%となっている。このように夫婦がその親と同居していなくても、半数の家族は、祖父母とその子ども夫婦とが比較的近くで生活していることがわかる。

また、共働き世帯数は、1980年以降、年々増加しており、1997（平成9）年に、男性雇用者と無業の妻からなる世帯数（片働き世帯）を上回り、それ以降、その差が徐々に拡大しつつある。2005年では、共働き世帯は988万世帯、片

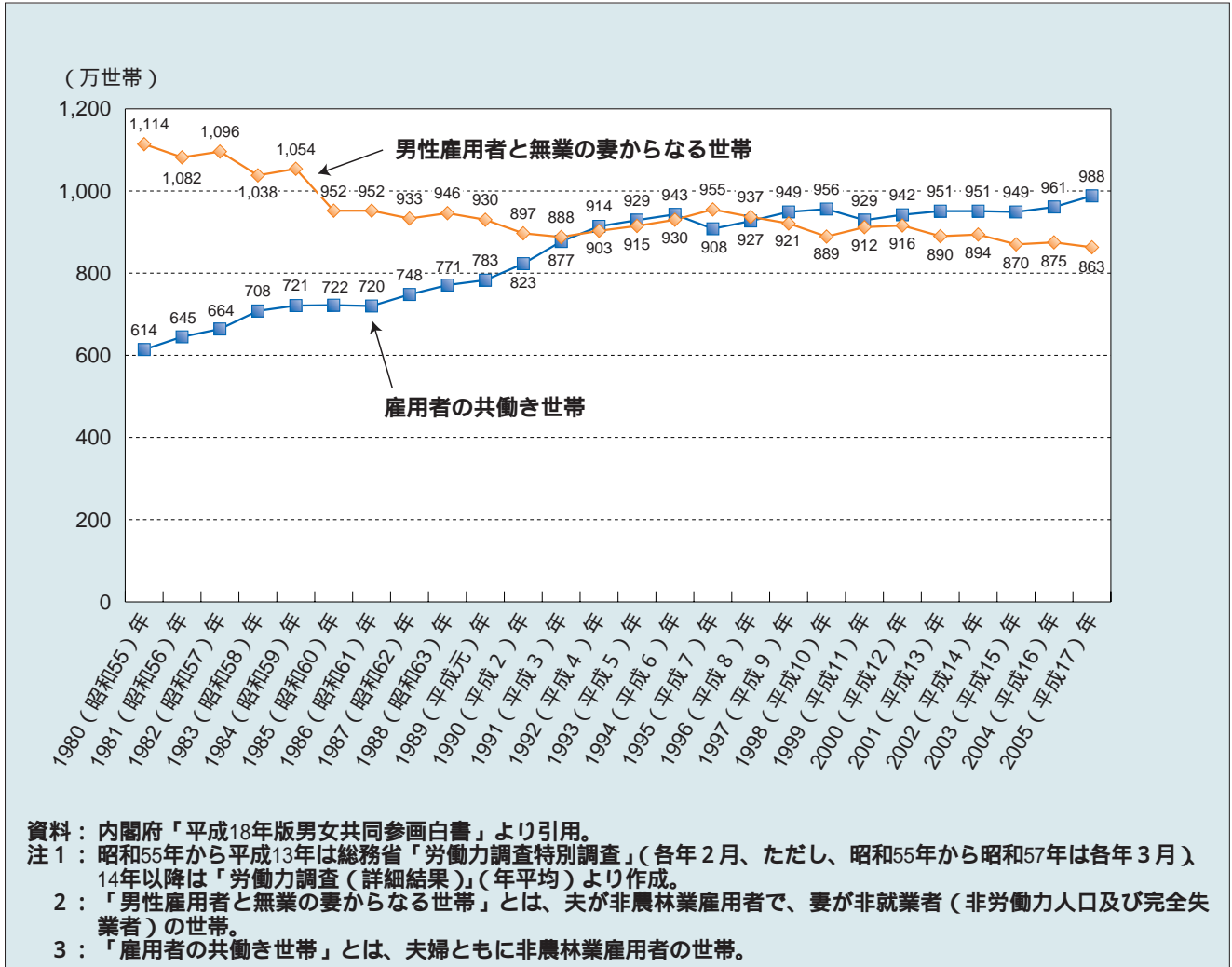
第1-5-2図 既婚者とその親との住まい方の実態



働き世帯は863万世帯となっている。第3章でみたとおり、末子の子どもの年齢が6歳以上の子育て家庭においては、半分以上が共働き世帯となっている。子育て支援策を考える際には、

共働き世帯と片働き世帯（いわゆる専業主婦世帯）の双方の家族形態を念頭に置く必要がある。

第1-5-3図 共働き等世帯数の推移



第5章

コラム

核家族はいつの時代から存在したか

核家族（nuclear family）とは、夫婦とその未婚の子どもからなる家族のことである。

わが国では、家族形態の変化の常套句として「核家族化の進展」をいい、第2次世界大戦後の高度経済成長の過程で、大都市への人口集中等により、3世代家族等の大家族が減少し、核家族化が進展してきたと認識しているのが一般的である。しかし、総務省の国勢調査結果をみると、必ずしもそうとは断言できない日本の世帯の変化の特徴がうかがえる。

第1-5-4表のとおり、核家族世帯は1920（大正9）年の第1回国勢調査時点でも、全世界帯の半数を超えていた。当時、子どもは5人以上生まれていても、結婚すると別世帯を構えるため、親と同居できるのは2組の子ども夫婦だけで、残りは核家族世帯にならざるを得ない。また、親の寿命も現在よりは短いため、親と同居できる期間も短かったものと考えられる。夫婦と子に加えて

第1-5-4表 世帯類型別構成割合の推移

(%)

	1920年 (大正9年)	1955年 (昭和30年)	1965年 (昭和40年)	1975年 (昭和50年)	1985年 (昭和60年)	1990年 (平成2年)	1995年 (平成7年)	2000年 (平成12年)
核 家 族 世 帯	54.0	60.6	62.6	59.5	60.0	59.5	58.7	58.4
拡大家族世帯 直系家族世帯 その他の親族世帯 非親族を含む世帯	約31	32.6	24.3	} 約20.8	} 約19.0	} 約17.2	} 約15.4	} 約13.6
	} 約8	2.9	5.0					
		0.5	0.3					
単 独 世 帯	6.6	3.4	7.9	19.5	20.8	23.1	25.6	27.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

資料：総務省「国勢調査」(ただし1920年は戸田貞三「家族構成」による。1975年までは普通世帯、85年以降は一般世帯の分類による。)

夫婦の親等が同居する拡大家族世帯の割合が、1920年当時で全世帯の3割となっていることも、こうした見方を裏付ける。核家族世帯は、実は戦前から「主流派」だったのである。

また、核家族世帯の割合が最も高かったのは1975(昭和50)年であり、その後減少傾向となっている。ただし、実数は増加しており、2000(平成12)年には2,733万世帯となっている。割合が減少しているのは、本文でも述べたとおり、単独世帯が急増しているからである。一方で、拡大家族世帯の割合は、年々減少傾向にあり、祖父母とその孫が同居する世帯は減っている。

核家族は人類にとって普遍的なものといわれており、たとえば、縄文時代の遺跡として有名な青森県の三内丸山遺跡の竪穴式住居も、平均4、5人の家族(夫婦とその子ども)が生活していたものと推測されている。

しかし、三内丸山遺跡の縄文人も住まいは核家族世帯であっても、周囲には一族がともに生活をしたであろうし、時代が下って、たとえば江戸時代では一般庶民(ほとんどが農民)は、近隣に血縁を同じくする人々が大勢いて、農作業をはじめ助け合いながら生活をするなど、実態的には大家族的な生活であったと考えられる。

したがって、現代の核家族、特に郷里を離れて都市に移り、新たに世帯を構えたような核家族は、近隣に血縁者が存在しない孤立した核家族という点で、古来の核家族とは性格を異にしており、孤立した子育てなど新たな課題を抱えている。

(参考文献『データで読む家族問題』湯沢雅彦、日本放送出版協会、2003(平成15)年、『歴史からみる日本の子育て』柴崎正行・安齋智子、(株)フレーベル館、2005年)

(2) 家族の役割と子育てに対する意義
(家庭の役割に対する意識)

家庭は社会を構成する最小単位であるが、現在の私たちは、家庭の意味をどのように認識しているのだろうか。

内閣府の「国民生活に関する世論調査」(2005年6月調査)によれば、現在の生活に満足している人の割合は59.5%(「満足している」7.7%と「まあ満足している」51.8%)であり、

不満とする人の割合は37.5%(「やや不満だ」27.0%と「不満だ」10.5%)と、満足している人の方が多い。

同調査で、家庭がどのような意味を持っているか尋ねたところ、「家族の団らん」の場」を挙げた人の割合が61.1%と最も高く、ついで「休息・やすらぎの場」(55.5%)、「家族の絆(きずな)を強める場」(46.2%)、「親子が共に成長する場」(35.8%)の順となっている。性別

にみると、「家族の絆（きずな）を強める場」、
「親子が共に成長する場」をあげた人の割合は
女性で高くなっている。

（子育てに対する意義）

内閣府の「社会意識に関する世論調査」
（2006（平成18）年2月）によれば、子育てを
楽しいと感じるか辛いと感じるか尋ねたところ、
「楽しいと感じることの方が多い」と答えた人の割合が49.3%、「楽しいと感じることと
辛いと感じることとが同じくらい」と答えた人の
割合が36.4%、「辛いと感じることの方が多い」と答えた人の割合が6.0%となっている。
2002（平成14）年の同じ調査と比較すると、ほとん
どこれらの割合は変わっていない。性別で
みると、「楽しいと感じることの方が多い」と
答えた人の割合は女性で高くなっている。

なお、「楽しいと感じることの方が多い」と
答えている人は、子どもがある人の場合には
54.7%、子どもがない人の場合には32.3%と、
子どもがある人の方が高い数値となっている。
この傾向は他の調査でも同様であり、子どもが
ない場合には概して子育てに対する楽しさの実
感がわきにくい、実際に子どもを持つと、子育
てを楽しいと感じる人が多くなるものといえる。

前述の世論調査において、子育ての楽しさにつ
いては、「子どもの成長に立ち会えること」
を挙げた人の割合が62.1%と最も高く、以下
「家族のきずなが強まること」（52.5%）、「子育
てを通じて自分が成長できること」（45.3%）
「子どもの様子を見ているだけで楽しい」
（38.2%）の順となっている。2005年の調査と
比較して、「家族のきずなが強まること」をあ
げた人の割合が49.4%から52.5%へと高くなっ
ている。

（家族・地域のゆらぎ）

明治時代以降の子育ては、基本的には父母と
その子どもの核家族において担われてきたが、
家族内（祖父母や父母のきょうだい、子どもの

きょうだい、親類等）における助け合いに加え、
身近な地域における助け合いやふれあい等を通
じて、子育てを地域社会全体で支援するという
機能が働いていたとみられる。

しかし、現在の子育ては、核家族化や離婚の
増大によるひとり親世帯の増加、地域社会にお
ける希薄な人間関係等によって、ややもすると、
地域において孤立したり、母親ひとりだけの
「孤」育てとなったりしている問題を抱えがち
であると指摘されている。

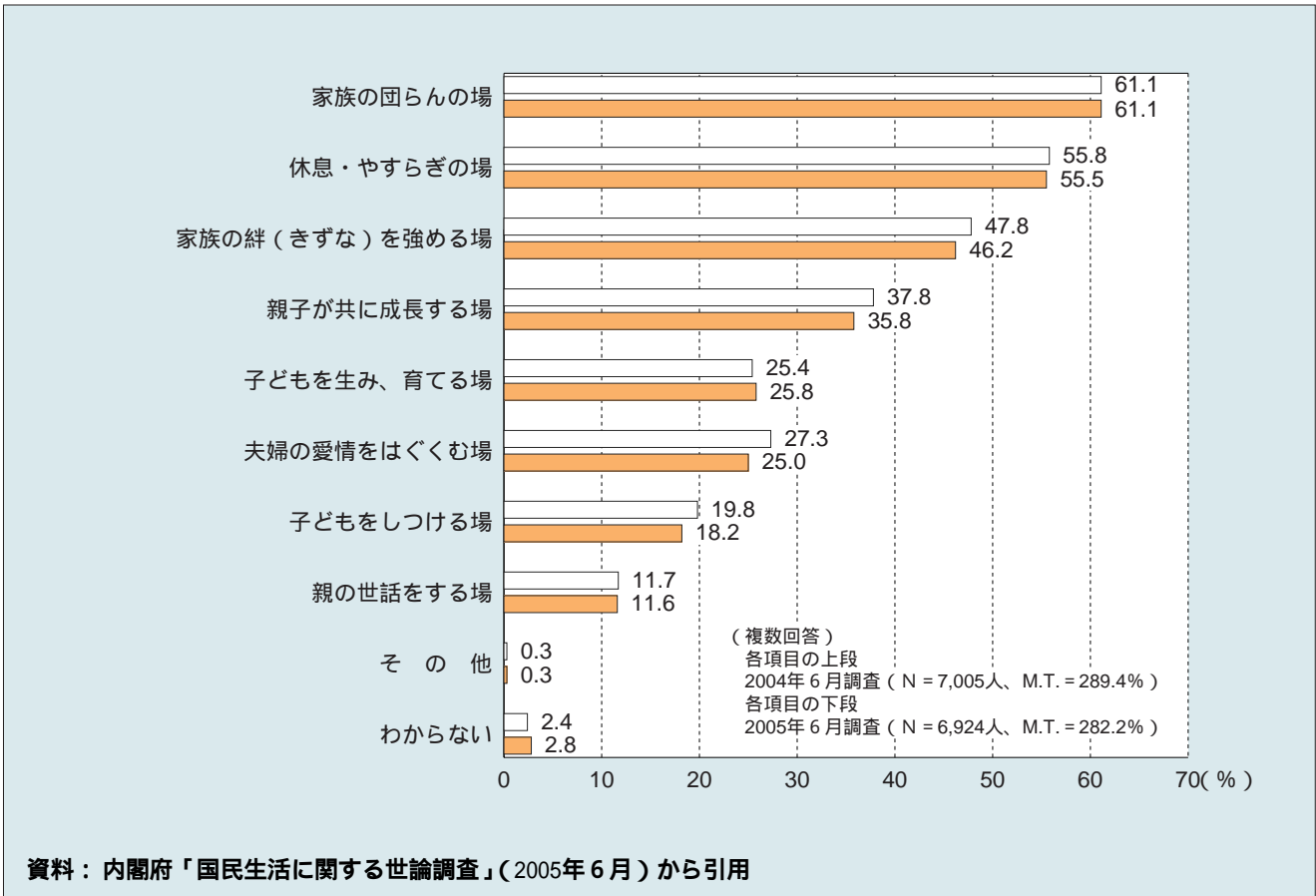
子育てをしている夫婦がその手助けを頼って
いる相手を見ると、その夫婦の親が突出して高
い（第1-5-7図を参照）。そのほかには、
ファミリー・サポート・センターなどの公的な
子育て支援サービスなどがあげられているもの
の、その割合は夫婦の親と比べればはるかに小
さい。近所の知人をあげる割合も小さい。かつ
ての日本では年長の子どもが年下の弟妹の「子
守り」をすることが普通であったが、きょうだ
いが少ない現在では例外的なこととなっている。
こうした状況においては、自分または配偶
者の親から援助が受けられず、外部の保育サー
ビスも受けていない子育て夫婦の場合、夫が子
育てを助けなければ、妻だけに子育ての責任と
負担がかかってしまい、いわゆる育児ノイロー
ゼや児童虐待等の不幸な事態を引き起こしかね
ない。

また、地域社会の中で人間関係が希薄化し、
お互いの協力関係が弱くなる中で、身近な地域
で相談相手や自分に代わって短時間子どもを預
けられる人がいないなど、子育てが孤立化し、
負担感が大きくなっている状況がみられる。ア
ンケート調査結果によれば、特に、在宅で育児
を行っている割合の高い13歳未満児を持つ母親
の半数近くが社会からの疎外感や孤立感を感じ
ている（第1-5-6図参照）。

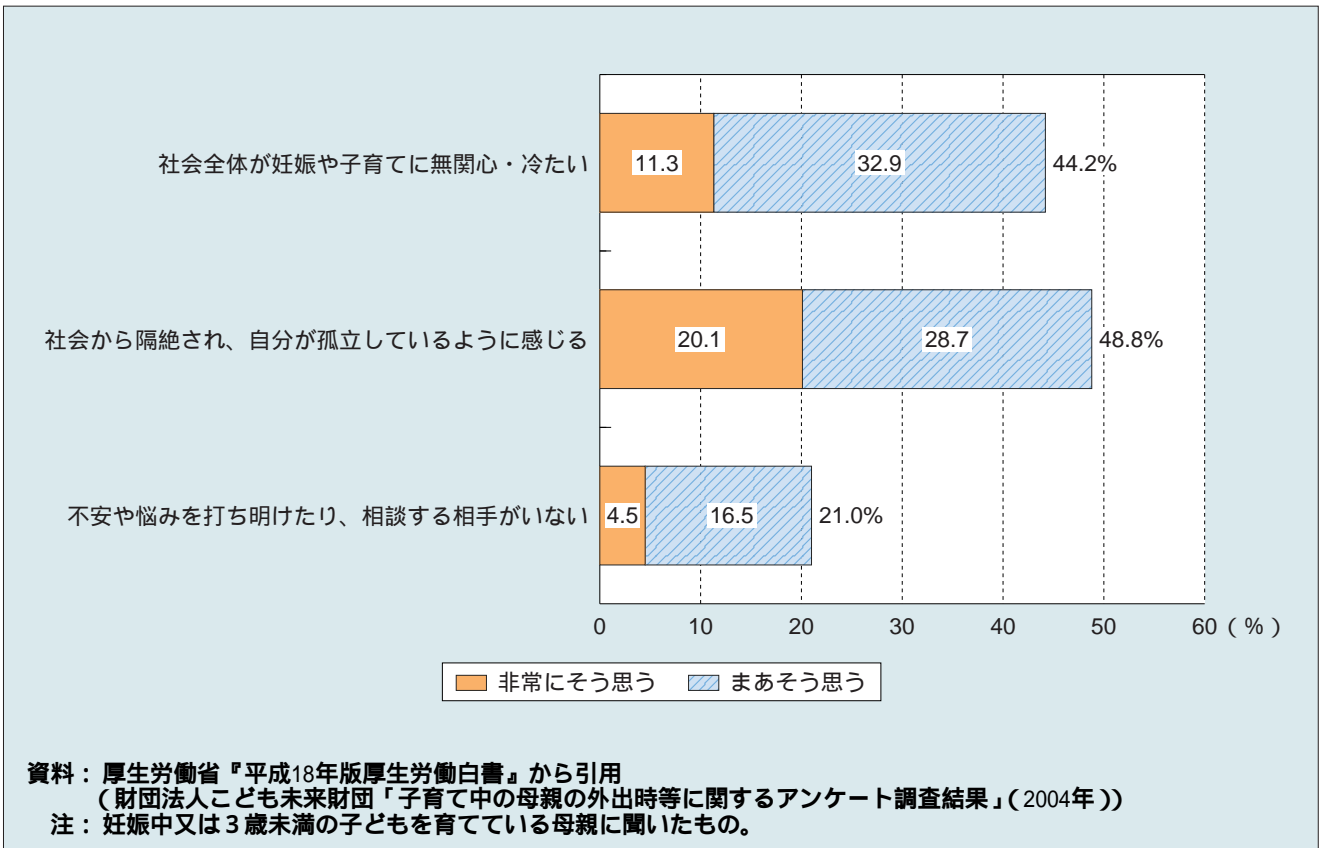
（親自身の未熟さの問題）

親自身が未成熟なまま子どもを生ま育ててい
るのではないかと、という問題点も指摘されてい

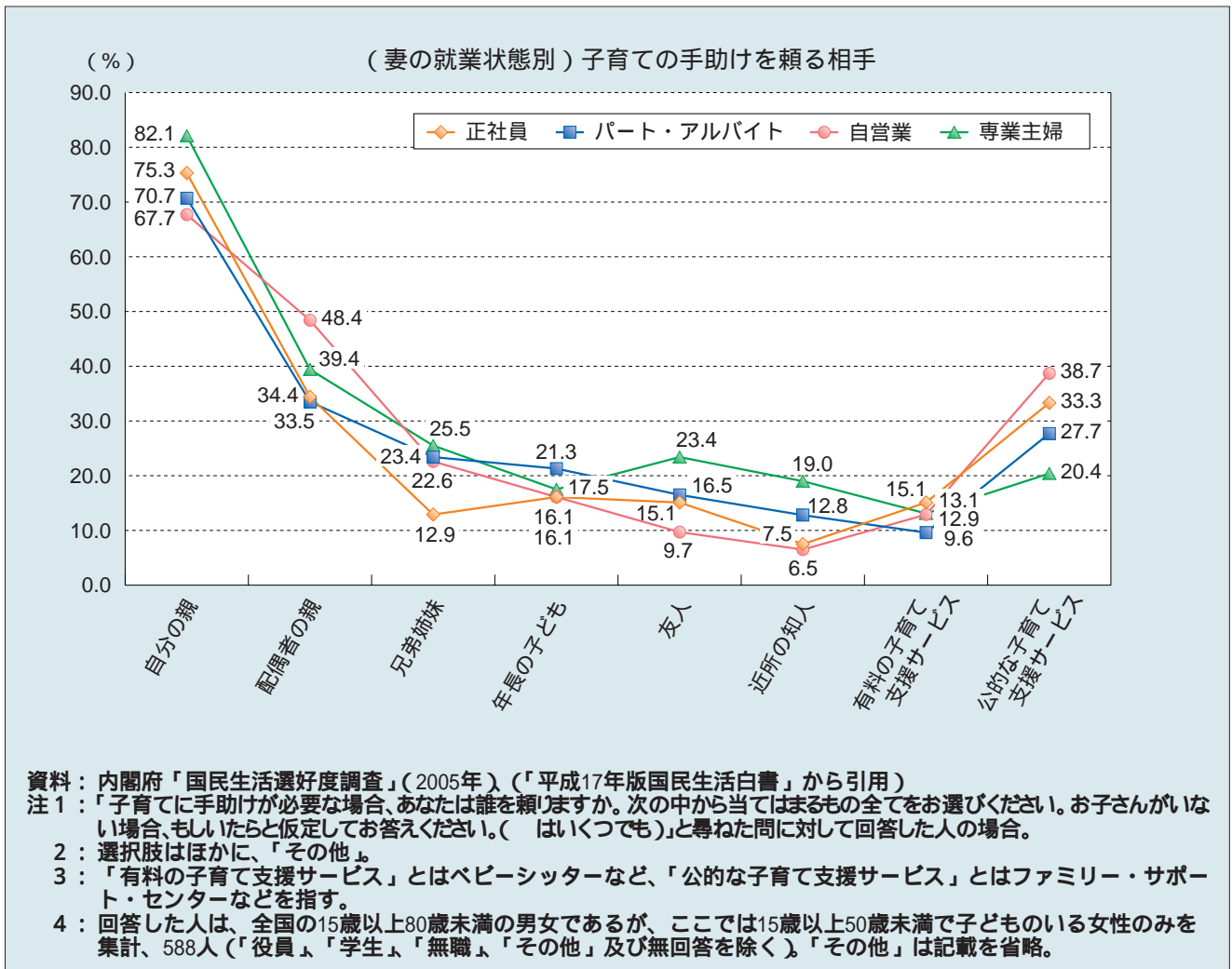
第1-5-5図 家庭の役割



第1-5-6図 周囲や世間の人々に対してどのように感じているか



第1-5-7図 子育てへの手助けを頼る相手は夫婦の親がほとんど



第5章

る。「子育てに関する意識調査」(2004年12月財団法人こども未来財団)によれば、子どもを取り巻く環境の問題点として、様々なものがあげられている。「親以外に子どもをしかる大人が少なくなった」(57.1%)、「子どもをねらった犯罪が多くなった」(50.7%)という地域社会の問題、「戸外で遊ぶことが少なくなった」(67.8%)、「自然にふれ合う機会が少なくなった」(65.8%)という子どもの行動の問題と並んで、「親自身が未成熟であることが多くなった」(70.3%)が高い割合で選ばれている。

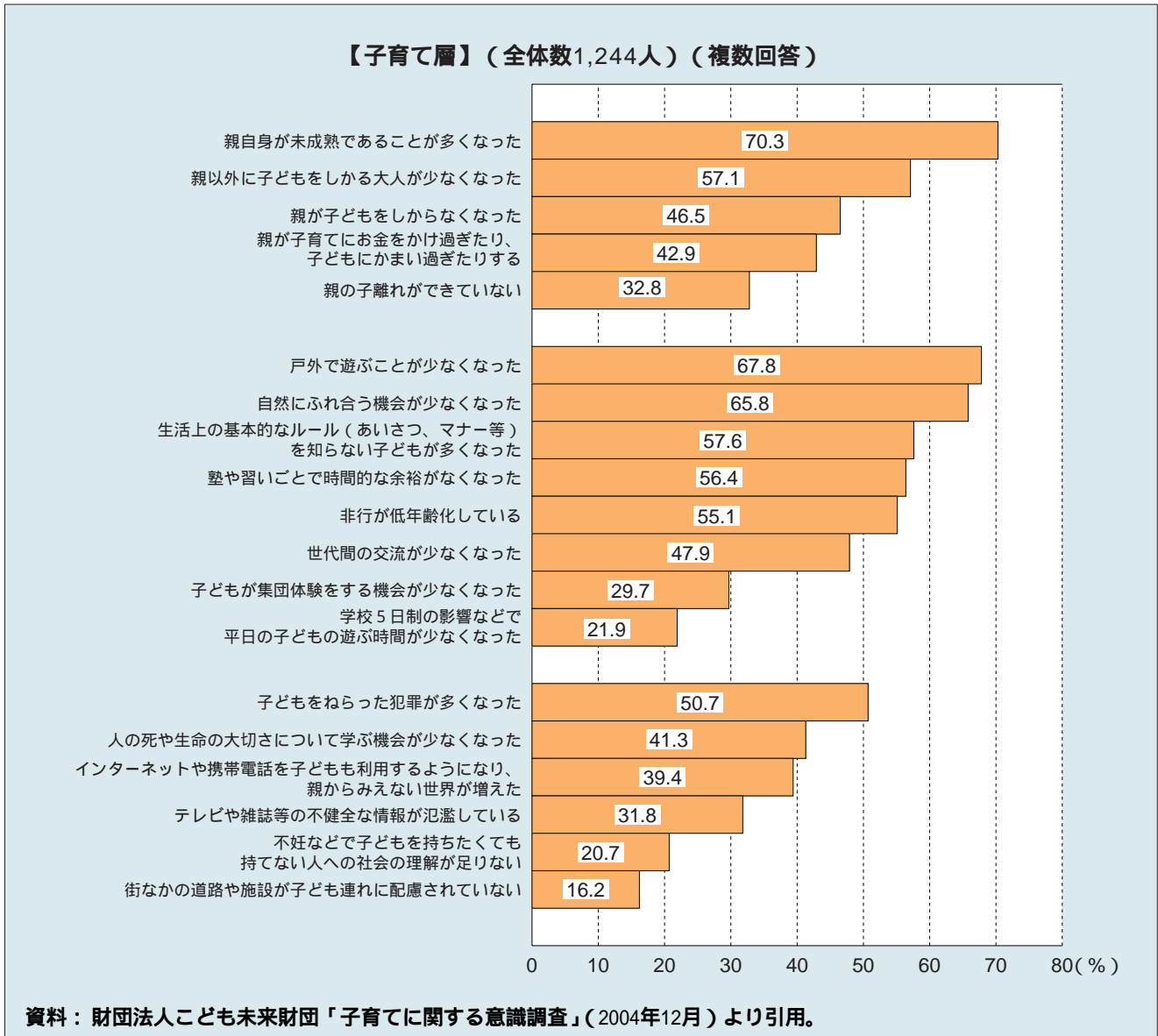
また、国立女性教育会館の「平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査」をみると、日本では他の国と比べて子どもの世話の経験が

少ない。「小さい弟や妹の世話をした経験」は日本(18.2%)は、タイ(32.4%)、アメリカ(36.0%)、フランス(28.1%)、スウェーデン(31.7%)より少なく、同調査の1994(平成6)年調査よりも5.4ポイント減少している。アメリカやフランス、スウェーデンではベビーシッターの経験も多いが、日本ではこの経験もほとんどないという結果となっており、子どもに接する機会が少ないまま親になっているという現状がある。

(児童虐待の問題)

近年、全国の児童相談所における児童虐待相談対応件数は増加を続け、2005年度においては34,472件に上っており、児童虐待防止法施行前

第1-5-8図 子どもを取り巻く環境について問題だと思うこと



の1999（平成11）年度に比べ3倍の増加となっている¹。相談の内容も、専門的な援助を必要とする困難なケースが増えており、特に、子どもの生命が奪われるなど重大な事件も後を絶たない状況である。児童虐待問題の背景には、家族の抱える社会的、経済的、心理的な問題等様々な問題があることに加え、地域の子育て機能の低下を背景とした養育力の不足している家庭が増加していることにも起因していると考え

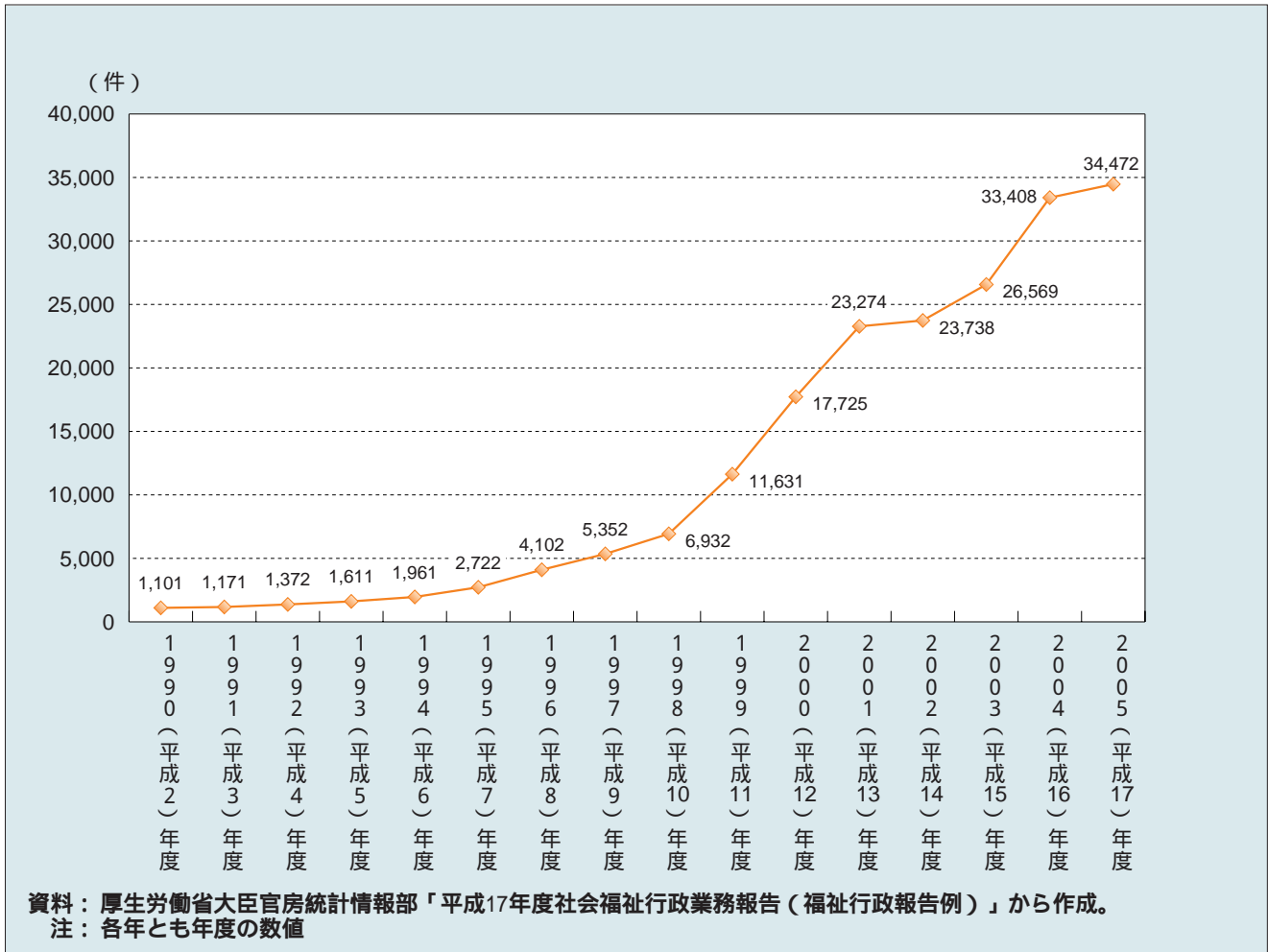
られている。

（親育ちの子育て支援）

内閣府の「社会意識に関する世論調査」（2006年2月）において、子どもを育てることについて今以上に大きな役割を担うべきものについて聞いたところ、「親や家族」と答えた人の割合が44.8%と最も多く、他では「子育てのための施設」（11.1%）、「行政」（11.1%）、「国

1 2005年度の児童虐待対応件数34,472件の内訳は、身体的虐待42.7%、保護の怠慢・拒否（ネグレクト）37.5%、心理的虐待16.8%、性的虐待3.1%となっている。また、主な虐待者をみると、実母61.1%、実父23.1%、実父以外の父6.1%となっている。

第1-5-9図 児童虐待の対応件数の推移



民全体」(9.3%)などとなっている。

子育ては次代の担い手を育成する営みであるという観点から、子どもの価値を社会全体で共有し、子育て家庭が安心と喜びをもって子育てに当たれるよう社会全体で支援することが必要であるが、いうまでもなく、子育ては父母その他の保護者が第一義的責任を持つものである。親や家族が子育ての基盤として確立していなければ、社会的支援も効果が薄くなり、児童の健全な育成を図ることができない。

したがって、子育て支援を進める上では、親自身が子どもを持つことや子育てについての自覚や責任感、あるいは子育ての能力を持つことができるように、中学・高校の頃から、これらの事柄に関する教育・啓発等が必要であると考えられる。さらに、仮に精神的に未成熟なまま親になった場合でも、家族や地域社会、行政等

が各種の支援をすることにより、「子育て」を通じて「親育ち」となるような誘導策が必要である。

（社会的な意識改革の必要性）

家庭は、子どもが親や家族との愛情によるきずなを形成し、人に対する基本的な信頼感や倫理観、自立心などを身に付けていく場でもある。しかし、職場優先の風潮などから子どもに対し時間的・精神的に十分向き合うことができていない親、無関心や放任といった極端な養育態度の親などの問題が指摘されている。さらに、前述したとおり、親による児童虐待をはじめ子どもの家庭内暴力、配偶者間の暴力など、現代の家庭・家族は深刻な問題を抱えており、社会として適切な対応を求められている。こうした問題の背景には、家族の絆や地域の絆が揺らいで

きている現状があるだろう。

総合的な少子化対策を進めていく上で、生命を次代に伝え育んでいくことや家族の大切さが理解されることが重要である。子どもの誕生を

祝福し、子どもを慈しみ、守り育てることは、社会の基本的な責任であることを、大人もこれから親になる若者も認識するように、社会全体の意識改革に取り組む必要がある。

コラム 子どもを大切にす文化

幕末から明治初期に日本を訪れた欧米人の多くが、日本の子ども達が様々な遊戯をしてにぎやかに遊んでいる様子や、礼儀正しくしつけられている姿、大人達が子どもを大切にし、子どもと遊び、子どもの成長を楽しみにしている様子を、驚きと好感、そして賛嘆をもって記録している²。

たとえば、幕末の駐日イギリス外交官であり『大君の都』を著したオールコックは、「子どもの楽園」という表現を使い、大森貝塚を発見したアメリカ人のモースは、「子どもの天国」であり、「世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない」と記述している。

1878（明治11）年、47歳にして単身で日本を訪れ、東北地方から北海道まで旅行をしたイギリス人女性のイザベラ・バードは、その著『日本奥地紀行』の中で栃木県・日光での見聞として、次のように書いている。

「私は、これほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。子どもを抱いたり、背負ったり、歩くときには手を取り、子どもの遊戯をじっと見ていたり、参加したり、いつも新しい玩具をくれてやり、遠足や祭に連れて行き、子どもがいないといつもつまらなそうである。他人の子どもに対しても、適度に愛情を持つて世話をしてやる。父も母も自分の子どもに誇りを持っている。見ていて非常に面白いのは、毎朝6時ごろ、12人か14人かの男たちが低い塀の下に集まって腰を下ろしているが、みな自分の腕の中に2歳にもならぬ子どもを抱いて、かわいがったり、一緒に遊んだり、自分の子どもの体格と知恵をみせびらかしていることである。その様子から判断すると、この朝の集会では、子どものことが主要な話題となっているらしいのである。」³

今では見られない光景ではあるが、男達が小さな子どもを抱いて互いに「子ども自慢」をしている様子が興味深い。これらの見聞記を読むと、明治以降の近代化から現代まで150年くらいの間、日本の子どもの行動や親と子の関係、地域社会の中での子どもの位置などにおいて、変化したもの、残っているもの、そして失われたものに対する感慨を呼び起こされる。

2 わが国における子育て意識の特徴

わが国は、戦後の経済成長に伴い、物質的な豊かさは飛躍的に向上したものの、前述したとおり、その間、経済的な豊かさや個人を優先させるライフスタイルの広がり等により、従来の子育てにおいて重要な役割を果たしていた家族の絆や地域の絆が薄まってきたことが少子化傾向にも影響を与えていると指摘されている。他

方、欧米諸国は、もともと経済的な豊かさや個人を優先する考え方が強かったにもかかわらず、最近では、フランスやスウェーデンのように、少子化の流れに歯止めをかけることに成功した国もみられる。

ここでは、日本、韓国、アメリカ、フランス、スウェーデンの5か国における子育ての意識を比較した調査（内閣府「少子化社会に関する国

2 渡辺京二著『逝きし世の面影』（2005年、平凡社ライブラリー）参照

3 イザベラ・バード『日本奥地紀行』（邦訳、平凡社。原書は1880年刊）